セインズベリー日本藝術研究所
―英国に根差して日本文化を発信―

Squire Patton Boggs（UK）LLP
（弁護士知財ネット国際チーム所属）
日本国弁護士・英国事務弁護士
南　かおり

イギリス南東部イーストアングリア（East Anglia）地方のノリッチ（Norwich）という街に所在のセインズベリー日本藝術研究所（Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures）[1]において、同研究所の水鳥真美統括役所長[2]にお話を伺った。水鳥所長は、一橋大学法学部を卒業後、外務省に入省、安全保障等の業務に従事され、大臣官房会計課長、在英日本国大使館公使・広報文化センター所長などを歴任された後、2011年に現職に就任された。文化・芸術分野の本職と並行して日英21世紀委員会（UK-Japan 21st Century Group）のメンバーを務められるなど国際関係の分野でも活躍しておられ、女性のキャリア転換に関するお話もお聞きしてみたいところであるが、今回の話題の中心は同研究所の研究及び日本文化・芸術の海外における認知度向上のための活動である。

日本文化・芸術研究は、その対象がそもそも独占権としての知的財産権の保護を受けるものでなかったり、または保護期間が終了しているものもあり、一見知的財産との関係が薄い分野とも思われる。しかし、世界の中での日本の存在感の希薄化を回避し、認知度を更に向上させるための活動の必要性、そのための広報のやり方、地方の活性化、アーカイブ化の必要性等、知的財産分野と類似する課題も多く、示唆に富むお話であった。

セインズベリー日本藝術研究所

1　http://sainsbury-institute.org/
2　http://sainsbury-institute.org/ja/about-us/staff-２/executive-director/

研究所設立の趣旨、経緯

水鳥所長：当研究所は1999年設立、今年で設立16年目になります。チャリティー団体としての独立した法人格を持っていますが、イーストアングリア大学（University of East Anglia）に所属し、私も含めて雇用者は大学です。このような日本と余り関係の深くない場所に研究所があるのは、現在、研究所から大英博物館に出向してキュレーターをしている、ニコル・クーリッジ・ルマニエール教授（Professor Nicole Coolidge Rousmaniere）がセインズベリーご夫妻と知り合ったことがきっかけでした。このご夫妻はイギリスの中でも有数の美術の個人コレクションを持っておられて、1970年代から寄贈先を模索しておられました。最終的にイーストアングリア大学に決め、当時まだなかった大学の美術館もご夫妻の寄付で新設すると申出ました。その美術館[3]は、今では非常に有名になっているノーマン・フォスター卿（Lord Norman Foster）という建築家[4]の最も初期の頃の建築物です[5]。当時から、イーストアングリア大学では、「ワールド・アート」という各国の文化芸術を横断的な観点から研究し、教えようという試みがあり、ハーバード大学で日本の美術史及び考古学を専攻して博士号を取得したニコルが教えに来ていました。そして、ニコルがサー・ロバート及びリサ・セインズベリーご夫妻と知り合い、それまで日本と余り縁がなかったご夫妻に、世界の芸術文化の中における日本の文化の位置付けの意義、重要性を熱心に話し、日本文化のための研究所設立の必要性を説得したのです。ご夫妻は自らのコレクションの中からモディリアーニの絵画を一点売却し、それを元手に研究所設立のための基金を作って下さいました。

日本文化の多様性を発信しながら文化の共通性を探る試み

南：元々サー・ロバート及びリサ・セインズベリーご夫妻が収集されたコレクションは、日本の美術品に限らないのですか？

水鳥所長：セインズベリーご夫妻は1930年代からコレクションを築いていくのですが、英国のフランシス・ベーコン、ヘンリ・ムーア、ジャコメッティといった人たちがまだ無名な頃に彼らの作品を多数購入し、支援していました。また、ご夫妻は世界各地の文化に関心をお持ちになり、各地の美術品も集めておられました[6]。年代によって関心をもつ地域が変遷していき、日本はかなり後の方、まさにニコルがノリッチに現れてから関心を持たれたようです。ご夫妻は、神像の頭、縄文土偶、鎌倉時代の地蔵菩薩、根来塗の瓶子など、他の美術館で見る日本コレクションとは少し違った持ち味の作品を集められました。

水鳥真美統括役所長

南：外国での日本の美術品の収集と聞きますと、浮世絵や蒔絵、螺

3　セインズベリー視覚美術センター（Sainsbury Centre for Visual Arts）http://scva.ac.uk/

4　ノーマン・フォスター卿。ロンドン市庁舎、「ガーキン（The Gherkin）」の愛称で知られる30セント・メリー・アクス（30 St Mary Axe）などの設計を手掛ける。http://www.fosterandpartners.com/projects/

5　セインズベリー視覚芸術センター http://scva.ac.uk/about/the-building

6　ロバート・アンド・リサ・セインズベリー・コレクション（Robert and Lisa Sainsbury Collection）の歴史の一部がセインズベリー視覚美術センターのウェブサイトに紹介されている。

セインズベリー日本藝術研究所のリサ・セインズベリー図書館。蔵書の多くが寄贈による。

鈿が好まれるという印象があります。土偶などは珍しいですね。

水鳥所長：その背景には、印象派の画家がジャポニズムに影響を受け、日本の浮世絵手法を使って作品を制作したということもあると思いますが、一つには、日本側の「売り出し方」にも原因があるのかなという気がします。例えば漆と言っても、蒔絵みたいな華やかな物だけでなく、朱色の上塗りと黒の下地の二色のシンプルな色使いで、僧侶などが日常使用してきた根来塗みたいなものもある。こういう日本の芸術の中の多様性が十分に日本から発信されていないのかもしれません。

南：当研究所では土偶や古墳に関連したプロジェクトなどもなさるそうですが、西洋のどういう人がご興味をお持ちになるのか、発信をしようにも、興味を持つ人がいること自体想像がつかないかもしれません。

水鳥所長：2009年に大英博物館のキュレーターと当研究所の研究者が協力して土偶展[7]を開催したのですが、先史時代の言葉も文字も関係なく人間の起源みたいなところから生まれた文化と言うのは、地理的距離は離れていても何か類似していて、そういう共通しているところが人間の好奇心をかきたてるのではないかと思います。また、都市国家を形成していく過程で墳墓を形成したのは日本だけでなく、例えばイギリスのイーストアングリア地方のサフォーク（Suffolk）州にも墳墓のようなものがあります[8]。このような、「異質性の強調ではなく共通性を探っていく」といったことは、この研究所のテーマの一つです。

日本文化研究所が外国に所在する意義

水鳥所長：なぜ日本文化に関する研究所が日本の中ではなくて、外にあるのか、その意義ですが、まさに日本の外にあって、かつ日本籍ではなくて英国籍の組織である、ということが重要だと思います。同じ一つの物でも、見る角度によって違って見える、というのはよくあることで、外国に拠点をおくからこそ異なった見方をすることが可能になる場合があります。例え

7　“The power of dogu:ceramic figures from ancient Japan”　http://www.britishmuseum.org/whats_on/past_exhibitions/2009/archive_the_power_of_dogu.aspx

8　サットン・フー（Sutton Hoo）遺跡。ナショナル・トラスト（National Trust）のウェブサイトに墳墓の写真も掲載されている。http://www.nationaltrust.org.uk/sutton-hoo/

第三木曜レクチャー会場のノリッチ大聖堂。

ば、日本から来た文化がどうやって欧州で受容されて解釈が変化したか、という点については、日本におられる専門家の解釈とは異なる視点もあり得ます。また、欧米の美術館は日本から来た美術品をどういうコンセプトで陳列しているのか、展示を通じて見せたいもの、伝えたい物語も海外での場合は日本と違うということも多く見られます。そういった違いを日本で理解してもらうために、３年前より、日本で、石橋財団のご支援で、英国の研究者や美術館関係者を講師に迎えて「石橋財団レクチャーシリーズ」という講演会を行っています。来年は日本庭園をテーマに京都で開催予定です。日本庭園は海外で非常に人気が高いですが、エキゾチックという捉え方ばかりでなく、例えば最近では、ホスピスで日本庭園を造って癒しの空間にしているところがあったり、同じ日本庭園でも海外での捉えられ方が時代とともに変遷し、異なる意義が見出されています。

それから、最近日本では文化を使って地方の再生を活性化するという動きがあります。地方の活性化に繋がるならば、地方の芸術祭にそれなりの役割はあるかもしれません。一方で、地方の高齢化や人口減少という問題に、本来政府が正面から取り組まなければならないのに、芸術祭をやって１年に１週間くらい人がきて賑わえばいいことになってしまう恐れもあり、問題の本質から目をそらすだけにならないか、という批判をする人もいます。批判が当を得ているかどうかは別にして、文化と社会問題の関連といったテーマについても、様々な視点からの議論があってもいいはずです。こういったことは、海外だからこそむしろ客観的に議論できるのかもしれません。この点に関しては、シンポジウムの開催を今年の12月に予定しています。このような、「社会の中で文化が果たす役割」というテーマも、当研究所が今後力を入れていきたい分野です。

こういった活動をする上で日本の外にあるからこそ、既存の考え方に捉われないで自由に議論できるということが、かえって功を奏していると思うことがよくありますし、日本の学者の方からもよく指摘されます。

様々な連携先

南：研究所主催の講演会のテーマはどのような視点で決められるのですか。

水鳥所長：何が一体、今、人々の関心を捉えられるのかを検討します。例えば、日本でなくイギリスで行っている企画なのですが、東芝国際交流財団からのご支援を得て、10年以上前から毎年、日本美術史、文化史に関する海外の研究者に連続講演をしてもらい、それを本にするとい

う企画を行ってきました[9]。数年前には、クリスティン・グース（Christine Guth）氏が、北斎の「神奈川沖浪裏」（「Great Wave」）という有名な版画に関する見方が３.11以後も含めて変化してきているという切り口から講演、執筆されました[10]。この企画が10年続いた後、さて、いま一体どういうテーマが重要なのかと東芝国際交流財団と相談し、アート＆サイエンスの接点を探りましょうということになりました。このシリーズの第２回目の講演として、今年の11月にロボットをテーマにした講演会を行うことになりました[11]。日本からロボット工学とプロダクトデザインの教授を一名ずつお招きして、これまでお二人が協力して取り組んで来られた、原子力発電所の廃炉、あるいは高齢化社会の中での介護用ロボットの開発など、社会的な課題に対応するためのロボット作りという分野で日本の研究者が何を考えて何をやっているのか、ということをアピールするための講演会です。この講演会の実施では、ロンドンの科学博物館（The Science Museum）と連携します。

南：連携先はどのように決めておられますか。

水鳥所長：何をしたいのか、ということに合わせて、連携先を考えます。この研究所が設立された当時から、大英博物館とロンドン大学東洋アフリカ学院（University of London, the School of Oriental and African Studies）が重要な連携先でした。その後、イーストアングリア大学にも日本語の学士課程のコースが設置され、セインズベリー・コレクションにも日本の美術品が加えられていったということから、イーストアングリア大学との連携は加速度的に深まっています。

南：連携先のリストに、長野県長和町というところが入っていますが、どういう経緯ですか？

水鳥所長：長和町は黒曜石の産地で、博物館[12]もあるのですが、町長様をはじめとする長和町の方々が、黒曜石を核にして国際交流をしたいということで、当研究所にご相談がありました。ここから遠くないセットフォード（Thetford）という町がフリントの産出地で、石の産地という共通点から出発して二つの町の交流を発展させたらどうでしょうということになって、中学生の交換訪問などの交流が始まりました。

南：地方によっては、そういった文化芸術分野の交流をきっかけに、長い目で見れば、いろんな経済効果を生む可能性もありうるということでしょうか。

水鳥所長：そういうこともあるだろうと思います。あとは、アウトリーチ、教育と言うことですよね。イギリスのあらゆる世代の人たちに対して、日本の芸術文化に対する関心、知識、理解をしてもらうよう努力することにより、そこから交流が生まれると考えています。そして、もしかしたら将来日本に行った子供の中から、日本のことを勉強しようとか、大人になってから日本に行ってみようとか、そういったことにつながる可能性もあると思います。さらには、国際交流を通じてその地域が活性化されるということもあると思います。そういったことにも我々が少しでもお手伝いできればいいなと思っています。

9　出版物一覧　http://sainsbury-institute.org/ja/publications/

10　Christine Guth“Hokusai’s Great Wave: Biography of a Global Icon”（University of Hawaii Press, 2015）

11　“Beauty and the Robot: Future Innovative Colaboration Between Science and Design” http://sainsbury-institute.org/news-events/toshiba-lectures-2015/

12　黒曜石体験ミュージアムウェブサイト（http://www.hoshikuso.jp/）にも、セットフォードとの文化交流について多数記載されている。

大英博物館で実施された土偶展、人間国宝展の図録

広範な活動範囲－日本文化・美術・歴史研究、世界遺産登録支援にも及ぶ

南：研究所のウェブサイトには、美術・文化資源、考古学と文化遺産、及び現代日本視覚メディアなどが研究対象として挙がっています。

水鳥所長：日本文化は、他の国に比べても古代から現代への連続性が強いと言われております。この点に着目し、日本文化を発信するときに、太古から現代まで、土偶もやれば、現代マンガも発信をする、そして時には両者を結びつけるというのが当研究所の一つの特徴です。

南：無形文化財や建築は記載されていませんが、これらも研究対象ですか？

水鳥所長：研究対象から外す、という考えはありません。無形文化財ではないのですが、世界遺産の登録に向けていろいろとお手伝いしているということはあります。例えば、九州の宗像神社の沖合に沖ノ島という島がありまして、そこは今でも女人禁制で、聖なる場所とされていて上陸が非常に制限されている、それだけに古代からの貴重な文化遺産がそのまま残っています。そこが今世界遺産に登録しようとしているのですが、登録のためには国際的にアピールする必要があり、シンポジウムの開催、英文での著作の出版といったことをお手伝いしています[13]。また、東北と北海道の複数の縄文遺跡群をあわせて世界遺産に登録しようという案件もあり、かつてパリでその関連のシンポジウムを行うなど協力しています。建築についても、今後何かきっかけがあれば、研究テーマになる可能性も十分あります。

研究所の財政－人件費・施設維持費確保の難しさ

南：研究所の年次報告書を拝見しますと、助成金の割合が比較的多いでしょうか。

水鳥所長：セインズベリーご夫妻が作って下さった基金からの収益、更に、セインズベリーご夫妻のご子息であるディビッド・セインズベリー卿が運営されるギャッツビー財団から助成を頂いている他、日本の国際交流基金、東芝国際交流財団、日本財団、石橋財団、及びイギリスのグレイトブリテン・ササカワ財団、大和日英基金などからもこれまでに多くのご支援を頂いています。また文化庁からも支援を得て、日本の人間国宝制度に関する展覧会を大英博物館との協同で開催したこともありました[14]。この展覧会は人間国宝の作品だけでなく、日本固有の人

13　日本からの世界文化遺産登録候補として「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」の推薦が決まっている。http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/2015090802.html

間国宝という制度がどういう考え方に基づいて作られ、どのように運用されているかという制度そのものに対する理解も深めていただくというのが目的の一つでした。そして、もう一つの意図としては、「Craft・工芸」の素晴らしさを伝えたかったということです。日本においては、工芸というのはまさに職人の技が極まった所で非常に美しい作品ができるということで評価が高いのですが、欧米においては、「Art・美術」というのは立派なものだけど、「Craft・工芸」というのはアマチュアの人もやっているようなもので、「Art」とは一線を画す、次元の低いものという概念がかなり定着しています。そのため、当初は、この展覧会の名称の中に「Craft」という言葉を使ってはならないとの考え方が大英博物館側にあったのですが、苦労した末に、「Crafting Beauty」すなわち「美を作る」という表現を使うことになりました。そして、展覧会が終わった後に、大英博物館館長が、キュレーターのニコルに対して、素晴らしい展覧会だった、「Craft・工芸」に対する考え方が変わったとおっしゃったそうです。

南：そうすると、展覧会などプロジェクトごとに資金の支援者も変わってくるということですか。

水鳥所長：そうですね、どういうプロジェクトを支援したいかというのは、助成する側、寄付される方々の考え方と大いにつながりがあると思います。例えば、研究所が設立当初から主催している「第三木曜日レクチャーシリーズ」は、グレイトブリテン・ササカワ財団の他に、ヤクルトUK社からもご支援頂き実施しています。一方、日本の歴史と文化についてのオンライン教材制作を企画した際には、日立ヨーロッパと日立ソリューションズヨーロッパに、こういう企画に寄付を頂けませんでしょうか、とお話しに行きましたところ、当事日立ヨーロッパの社長をされていた方が、これは非常に面白い、ご協力しましょう、とおっしゃって下さいました。まさに案件ごとにどなたにご相談すれば支援して頂けるかを考える、ということですね。

しかし、世界的に芸術文化分野への財政支援が削減される傾向にあり、大英博物館やビクトリア・アンド・アルバート美術館（The Victoria and Albert Museum; V&A）ですら、プロジェクトごとに資金を外部から得ています。英国の主要博物館の日本関連部門では、将来に対する不安が非常に大きいようです。最も深刻な問題は、人件費と施設維持費です。学芸員も含め、雇用者のほとんどについて、外部から３年ごとくらいの補助金を得て人ぐりをしているという状況です。現時点では、大英博物館やV&A本体から終身雇用されている方々も、彼らが定年を迎えたときに、自動的に後任者の任用があるとは限らない、と話しておられます。そうすると、大英博物館やV&Aのような、非常に重要な海外の日本のコレクションがあるところでも、それを維持し、かつ展示できる専門家がいなければ、死蔵品になってしまいます。海外における日本美術のコレクションは、そういう非常に難しい状況に直面しています。

当研究所の状況も中長期的には決して楽観視できません。人件費と施設維持費は、現在は基金の収益及びギャッツビー財団からの助成から出ていますが、財団からの助成がいつまでも続くということはありません。一方、人件費・施設維持費・管理費に対する支援については、日本の助成団体の方針は、欧米に比べると官民ともに基本的に厳しいというのが現状です。人がいて、建物があって初めて研究や教育のプロジェクト実施が可能になるのですから、そこは是非とも見直してほしいと思います。国際交流基金にも、外国の大学が新設する日本学関連のポストの経費負担をする制度があるのですが、対象は新設のポストのみで、既存のポストへの支援を得ることは難しいということが現状です。

---

14 “Crafting Beauty in Modern Japan” http://www.britishmuseum.org/whats_on/past_exhibitions/2007/archive_crafting_beauty.aspx

南：結局、既存のものがうまく活用されていないという印象を受けます。

日本から海外への文化の発信　－　効果的な「売り方」

水鳥所長：先ほどお話しした通り、当研究所は資金面で比較的恵まれている方で、日本の政府系の組織、財団または企業などからも様々なご支援を頂いていて、大変感謝しています。しかし、日本の文化芸術をもっと世界に発信したいということであれば、やはり日本の官・民・個人が、もっと財政支援をしないとこの先なかなか厳しいという気がします。もっとも、最近では、日本は官邸を中心に発信を強化するために予算を設けていると反論をされる方もおられると思うのですが。

南：「クールジャパン」ですね。

水鳥所長：コンテンツの海外展開自体には意義はありますが、「こういう形で日本を発信したい」という発信する側の思い入れが前面に出すぎてしまっているような印象を受けます。

南：アニメや漫画に興味がない人も、潜在的には日本に興味を持ってくれる可能性があります。例えば、今年７月にBBCで日本の自然と野生動物を特集した３回シリーズの番組[15]がありましたが、イギリスにいる人たちが素敵だと思う撮り方をしていて、非常にうまいなと思いました。私の周囲では非常に評判が良く、アニメも漫画も全く興味がないけれど、あの番組を見て日本に行きたくなった、という人が職場にもいました。結局それで日本に旅行してお金を落としてくれるわけですよね。

水鳥所長：今おっしゃったことで大事なことは、「売り方」ですね。同じ素材でも、日本人受けする売り方と、欧米人受けする売り方があります。日本国内で成功したやり方が必ずしも欧州の人の琴線には触れないということが多々あると思いますし、アジアなど他の地域でもまた受け止め方が異なると思います。素材は日本のものを使いつつ、それをどうすればもっと受け入れられるように出来るのか、その結果、どこにどうやってお金を落としてもらえるのかという観点も含め、「売り方」をもっと工夫する必要があるのではないでしょうか。「日本のことは日本人にしか分からない」、「日本文化は難解である」、「日本は特殊である」、そういった観念が実は大きな障壁になっているように感じます。日本のことは日本人にしか分からないということは決してありませんし、日本文化の理解の仕方も様々でよいはずです。日本文化にはもちろん固有の特徴はありますが、先ほど申し上げた先史時代の話に限らず、文化芸術を通じて何を人間は表現しようとしているのか、社会にとってどういう意味があるのか、むしろそういった万国共通の視点を探っていく方向で考えていかないと、最終的に日本文化の認知度は向上しないのではないでしょうか。

南：　2015年知的財産推進計画の中では、海外市場で受け入れられるコンテンツの制作、現地化支援、共同制作の促進、継続的な展開等の記述があり、この分野に相当注力されているように見えます[16]。こういう新たな制作への支援も非常に重要なことだと思いますが、既に海外である程度実績を上げておられる組織に対する支援についての言及はなされていません。

水鳥所長：既存の、これまで世界各地で頑張って現地の組織としてやってきたところを支援するということも大切だと思います。現地に根差している組織は、どうやったら日本の文化を最も

15　“Japan: Earth’s Enchanted Islands ”　http://www.bbc.co.uk/programmes/p02n9ty0

16　2015年　6月「 知的財産推進計画2015」20-28頁https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/kettei/chizaikeikaku20150619.pdf

効果的に発信できるか、というノウハウがあります。「日本」というブランドがこれだけ国際的になっている中で、まさに日本文化に対するいろいろな見方があってこそ、それが日本の文化の豊かさにつながる、そういう気持ちをもって、既存の組織も支援し、それらの組織とのネットワークを強化していく必要があると思います。

日本学の継承のための人材育成

水鳥所長：人材育成に関連して、今現在進行中のプロジェクトとして、最近急速に注目が高まっている大規模公開オンライン講座（Massive Open Online Course；MOOC）を製作中です。東京大学と協定を結び、来年２月から、５名の学部生を４年間にわたり、２週間ずつ受け入れます。彼らには必ず、来る前にこのMOOCの講座を履修し、英語の勉強も兼ねて、我々の研究所が所在するノーフォークという地域及びこの地の考古学、文化遺産、あるいは文化資源について学び、準備してから来て頂くことにしています。

南：逆に、東京大学にイギリスの学生が留学されるプログラムもありますか？

水鳥所長：それは先行して、去年から行っています。日本で日本の文化資源学や考古学についての勉強をしたいという学生を欧米から募り、５名を過去２年間、夏の間２週間受け入れて頂いています。東京大学での座学、都内博物館などでの研修に加え、北海道の常呂市にある発掘調査現場でのフィールドワークを行うプログラムです。５名分の枠に100名近い応募が欧米各国からあり、非常に人気が高いです。

当研究所は多くの日本の大学と提携していますので、東大とのプロジェクトが成功すれば、他の日本の大学との交流にも広げていきたいですね。ただ、ネックになるのが学生の英語力です。全体にもっと日本の学生の英語力を底上げしないと、交流の拡大は難しい面もあります。

日本人学生の読み書きの能力は決して悪くないのですが、口頭での発信能力を高める必要があると痛感しています。

南：私も、日本人のプレゼン力の弱さは顕著だと感じます。

水鳥所長：そうですね。そのプレゼン力も急に身に付くものではないですから、子供の頃からの訓練も必要かもしれません。

それから、アメリカでは、大学で英語の論文の書き方を教える科目があります。母国語だからと言って、いきなり論文が自在に始めから書けるはずはない、論文を書くための技術を身に着けるということが必要だという認識にたっています。また、こちらに来て知ったのですが、「エディター」という、編集の専門家が非常に多いですね。これも同じ発想で、母国語だからと言って必ずしも歯切れの良い分かりやすい文章を誰もが書けるわけではない。そこで、そのために専門の人が要るということです。日本ではわざわざ第三者に依頼して日本語の文章を修正してもらうという慣習は欧米ほど根付いておらず、自分の文章を直されることにつき、特に学者の方の間では忌避感が強いのではないでしょうか。これは文化の差異だと言えばそれまでのところですが、少なくとも、日本人が英語で文章を書いたりプレゼンをしたりする場合には、母国語の人以上にエディター、コーチングなどの助けが必要だと思います。

南：当研究所では、「フェローシップ」という客員研究員制度があるとのことですが、対象者から研究所にはどういう還元を期待されていますか？

水鳥所長：幾つかのフェローシップ制度がありますが、例えば、ロバート・アンド・リサ・セインズベリー・フェローシップは、日本文化、芸術の分野で博士号を取ったばかりの若手の人を中心に、彼らが博士論文を本にするための時間と資金を提供し、大学などでの雇用につなげる

ことを支援する制度です。国籍は問いませんが、日本学の専門であることが必要で、これまでに日本、そして欧米の主要大学で日本学の教員になる方を多く輩出してきました。当研究所への還元ということではなく、世界における日本学全体の維持、推進のための人材育成に貢献したいという趣旨です。

南：実際その日本学の教員のポストは・・・？

水鳥所長：残念ながら減っています。

南：知的財産の世界でも、欧州では知的財産法講座の中で日本法の科目が廃止される傾向にあるそうです。

水鳥所長：美術史の世界で顕著なのは、日本美術だけ教える講座は減っていまして、今や中国美術、韓国美術と一緒の東アジア美術の講座になってきています。イーストアングリア大学が日本語を学ぶ学士過程を始めようということになった時に、ヤクルトUK社からのご支援により准教授ポストを作れなければ実現しませんでした。このように日本企業による冠講座設立のための支援は大変重要ですが、最近は少なくなっています。大げさに聞こえるかもしれませんが、日本学自体がやがて消滅してしまうのを防ぐには、日本の官民はもう少し支援しないと、厳しいですよね。

文化財散逸の防止－データベース化・アーカイブ化及び「修復」分野の人材育成の必要性

水鳥所長：　イギリスには、日本コレクションを持っている美術館が地方にも結構あるのですが、そういう地方美術館は、日本美術の専門家が常駐しないために、あまり活用されていない状況です。例えば、ケント（Kent）州にあるメードストーン美術館（Maidstone Museum）[17]には比較的大きな3,000点くらいの日本コレクションがありますが、所蔵している品目が完全に把握されておらず、それらの由来などの研究もほとんどなされていません。そこで、今年、ギャッツビー財団からの助成金を一部割当て、専門家を雇って全てのコレクションの登録、アーカイブ化をするというプロジェクトを実施することになりました。同様の支援を必要としている美術館が多数あると思いますので、今回のメードストーン美術館での登録・アーカイブ化プロジェクト終了後に、問題点と必要な対応策を洗い出したいと思っています。しかし、当研究所で全ての地方美術館向けに資金と人を出すのは到底不可能ですから、資金と人材の派遣を含めて、日本からも、データベース化・アーカイブ化の支援をして頂ければと思っています。

南：データベース化・アーカイブ化がされていないと、散逸してしまうおそれがあるということですね。

　文化庁のウェブサイトには、海外に文化財を出す際の古美術品輸出証明の手続が示されており[18]、散逸の危険については認識されて規制がされているようですが、既に外国に所在する美術品の散逸への対応措置というわけではなさそうです。また、文化財のデータ集約及びデジタルアーカイブ化については2015年知財推進計画に入っているものの[19]、やはり外国にある美術品等については、余り検討されていないように見受けられます。

水鳥所長：アーカイブ化と同様、「修復」も非常に重要な問題です。日本美術の修復には極めて

17　http://www.museum.maidstone.gov.uk/

18 「文化財の海外流出を防ぐために ～古美術品輸出鑑査証明～」http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/kokusai/kobijutsuhin/

19　知的財産推進計画2015」44－49頁

特殊な技術が必要です。大英博物館には平山郁夫先生が資金を拠出されて作られた「平山スタジオ」という、日本美術品のみならずアジア全般の美術品の修復を行う専門の部署があります。その運営費用は、大英博物館及び住友財団などが支援していますが、このような規模と専門性を持つ施設は、英国の中でも大英博物館にしかありません。また、東京文化財研究所[20]が、日本美術の修復を伝授するためのシンポジウムやコースなどを運営して人材育成を行っており[21]、これは非常に重要な支援なのですが、この分野での支援は、まだまだ需要に対して供給が足りない上に、かなり予算がひっ迫しているようです。地道な修復やアーカイブのための人材育成はなかなか厳しいです。必要とするところ全てに恒久的に人を配置することは到底不可能ですから、どうやってそれを埋めるのか、どこかにプールして派遣するとか、資金を出して、既に技術を持つ専門家を短期的にでも派遣するための支援をするとか、いろんなやり方があると思います。しかしいずれにしても、この分野は今かなり腰を据えて取り組まないと、技術を持った専門家がいなくなってしまいますし、そうこうしているうちに、海外に出ている文化財が散逸してしまうという危惧があります。

「人文における基礎研究」の重要性

南：研究所のウェブサイト上の所長の時季の挨拶として、日本に限らず人文教養系の学部の廃止の動きがあるということについて危機感を持っているとお話しされています[22]。「芸術」と一口に言っても、データ登録・アーカイブなど管理する人も、修復する人も必要だということであるのに、人文系の教育自体が不要なものとされる傾向にあるのでしょうか。

水鳥所長：文部科学省が出された「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて（通知）」に関する下りですね[23]。そのような捉え方は誤解によるものとの下村文科大臣[24]の発言に関する記事も最近読みましたが、通知内容を素直に読むと、やはり人文系教育・研究の軽視としかとらえられません。欧米で日本学を教えている人々の間で危機感が高まっています。

南：クールジャパンに関連して、コンテンツの海外展開、クリエイターの育成、世界の文化人との文化交流、デジタルアーカイブ活用の強化等の計画があるようです。これらはいずれも人文系の話ですよね。

水鳥所長：なぜいまだに日本学を学びたい学生がこれだけ外国にいるかというと、若い人は、いわゆるポップカルチャーに魅せられて、それを理解しようと思って日本学を勉強したいと大学の門を叩いてやってくることが多いのです。そういう意味で日本のコンテンツが持つ魅力と言うのは非常に優れていると思います。しかし、あえて問題点を指摘すると、日本の文化の発信がそれに偏っているように見えることです。ポップカルチャーから入門した学生の多くは、その後は日本の歴史、社会、伝統美術をはじめ、より広範な日本に関する知識を求めていきます。よく科学で基礎研究が大事だと言われますが、人文においても全く同じことです。やはり

20　独立行政法人国立文化財機構　東京文化財研究所　http://www.tobunken.go.jp/index_j.html

21　東京文化財研究所　保存修復科学センター　http://www.tobunken.go.jp/~ccr/index.html

22　総括役所長からのメッセージ「2015年後半を迎えて」 http://sainsbury-institute.org/ja/news-events/message-from-the-executive-director/

23　平成27年５月27日　国立大学法人評価委員会（第51回） 配付資料10-３「国立大学法人の第２期中期目標期間終了時における組織及び業務全般の見直しについて（案）」３頁　http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/kokuritu/gijiroku/__icsFiles/afieldfile/2015/05/27/1358297_15_1.pdf

24　2015年９月17日当時

2015年９月17日の「第三木曜レクチャー」の様子。

文化・芸術・歴史の基礎研究があってこそ、そこからさらに異なる色々な発想が出てきて、多くの人に受ける面白い研究、作品、発想も出来てくるのではないでしょうか。基礎が何もないところから商業化されるようなアイデアが出てくる場合ばかりではないような気がします。即座に利益につながらないかもしれませんが、そういう「人文における基礎研究」の研究者、教育者を育てることをやらないと、いずれは日本学だけでなくコンテンツ産業にも影響が広がってしまう懸念があるように思います。

水鳥所長へのインタビュー後、毎月開催の「第三木曜レクチャー」に出席させて頂いた。本レクチャーシリーズは、グレイトブリテン・ササカワ財団に加えて、昨年からヤクルトUK社の支援により運営されている。当日お目にかかったヤクルトUK 社長の松原弘泰氏によると、ヤクルト社では、文化教養を支援する活動が長い目で見れば会社の収益にもつながると考えており、その一環でセインズベリー日本藝術研究所も支援している、とのお話であった。

当日の講演はダミアン・フラナガン（Damian Flanagan）氏による三島由紀夫に関するもので[25]、会場は約80席がほぼ満席、質問も多く出され活気ある講演会となった。参加者は地元の人が多い様子だったが、ロンドン他から数時間かけて来られる方もおられるようである。参加者の一人は、当初は日本について特に興味はなかったが、誘われるままにこういったレクチャーに参加しているうちに日本の文化が大好きになり、セインズベリー研究所の友の会にも入会した[26]、と話しておられた。本レクチャーシリーズ開始当初は数十名程度の参加者だったとのことであるが、地元の人々の間に根付いて来ていることが伺われた。

知的財産の分野との共通課題

冒頭述べた以外では、水鳥所長が指摘された「見せ方」「売り方」の課題についても、小倉秀夫弁護士によるJ-POPの海外展開についてのご指摘に相通じるものがあると思われる[27]。また、

---

25 “Who Killed Yukio Mishima? Time and Destiny in the Life and Work of Japan’s Master Author and Playwright” http://sainsbury-institute.org/news-events/third-thursday-lectures/

26 セインズベリー日本藝術研究所では、企業等からの寄付を募集しているほか、友の会に入会し年会費を支払う方法により個人でも寄付をすることが可能である。個人会員の年会費は一人45ポンド（2015年９月30日現在　約8,200円）http://sainsbury-institute.org/ja/support-us/

知財紛争処理に関する情報の海外発信も知財戦略の重要課題の一つとされるものの、海外在住の筆者には、関係者の努力に相応する成果が得られているのか疑問に思う場合がある。例えば、各種公的機関や法律事務所のウェブサイトなどには、多くの情報が英文で掲載されているが、必ずしも現地の知財専門家の興味の対象と合致するものばかりではない上、現地の知財専門家が日常目にする媒体に掲載されていないため、現状では「知りたいと思う人がわざわざ検索してようやく辿り着く」状況のように見受けられ、この点も「見せ方」にさらに工夫が必要なのかもしれない。

水鳥所長が、何度か「異なった見方の重要性」「長期的な視野」という趣旨のことを話されたことも印象に残った。長期的に見て「日本イメージの向上を通じた訪日観光客の増加等、コンテンツ産業にとどまらない経済的、文化的な波及効果が期待」[28]できるのは、デジタルコンテンツのみではないはずである。データ集約の推進や修復技術者の育成は美術品の維持保存につながり、国内外の美術館に貸与することで利益を生む場合もないわけではないであろうし、これらをテーマにした研究やコンテンツ制作を行うことで新たに知的財産権保護の対象となる作品を生む可能性もあり得る。すなわち、知的財産権保護がない、または終了した作品であっても、「知的活動による財産」としての価値が減じるわけではないのである。知的財産制度に関連して海外展開について検討する際は、10年後、20年後、50年後を見据えて、日本がその時々に世界の中でどういう位置を占めていたいのか、そのときのキープレーヤーは誰か（どの国か）、外国の現地の実務家にはどのように受け止められているか、といった視点をもって行う必要があるのではないかと考えた。

27　知財ぷりずむ2015年７月号「J-POPをどうやって輸出しよう？」 http://www.iplaw-net.com/doc/2015/chizaiprism_201507_3.pdf　知財ぷりずむ2015年10月号　前田葉子弁護士「『クールジャパン』戦略と映像コンテンツの海外展開」23，29頁でご指摘の点も、共通の問題意識が見て取れる。http://www.iplaw-net.com/doc/2015/chizaiprism_201510_1.pdf

28 「知的財産推進計画2015」20頁(1)

折しも本稿執筆中、イングランドで開催中のラグビー W杯において、日本が強豪南アフリカから予想外の勝利を収め、好感を持って大きく報道された。ラグビー発祥の地、かつW杯開催地でもあるイングランドが早々に敗退してしまった中、日本の勝利がW杯を盛り上げるのに一役買っているように見えた。